

福祉につながる認知研究—チンパンジー研究の新しい展望

出典：ミネルヴァ書房『発達』133号（2013年冬号）、連載「霊長類の比較発達心理学」第112回、96-103頁。著者：松沢哲郎。ミネルヴァ書房から転載許可取得。

1978年からチンパンジー研究をしてきた。チンパンジーの心を人間のそれと比較する研究である。日本の実験室と、アフリカの自然の生息地で、平行しておこなってきた。「人間とは何か」という問いに答えるうえで、進化の隣人であるチンパンジーの研究は欠かせない。しかしこれまでの研究は、究極的には、真理を追求するため、未知なものを解明するためのものだった。極論すれば、研究のための研究である。それに対して、チンパンジーは絶滅の危機に瀕している、という事実が発した別の研究の視点があるだろう。絶滅危惧種を野生でどのように保全していくのか。飼育下の絶滅危惧種の福祉をどのように向上させるのか。いわば、「保全につながる研究」あるいは「福祉につながる研究」である。従来の比較認知科学の成果のなかから自然に生まれてきた新しい視点だ。21世紀のチンパンジー研究に求められているものを考察したい。

子育てできない母親

アイという当時1歳半のチンパンジーを対象に、チンパンジーと人間の知性の比較研究を始めた。のちに「アイ・プロジェクト」と呼ばれるものである。アイが初めてキーボードのキイに指を触れた日、1978年4月15日をもってプロジェクトの実際の開始日といえる。同じく子どものアキラとマリ、さらにはベンデーサがそれに加わった。当時の研究チームのリーダーだった室伏靖子先がさらにあかんぼうを産ませようと考えた。

そうしてやってきたのが、10歳代半ばの繁殖適齢期にかかる若い男性のゴンと女性のプチである。研究所の創立直後からレイコという女性がいた。これで、繁殖可能な、人間でいえば20歳台の若い男女3人がそろったことになる。

3人とも1966年にアフリカで生まれたと推定されていた。それが人間によって捕まえられ、動物商の手を経て日本に来た。人間が育てたチンパンジーである。さて、ゴンはセックスができなかった。射精はするのだが、うまく女性と関係が結べない。そこで人工授精をすることになった。

現在のような顕微鏡のもとでの授精ではない。もっと単純な手法だ。男性を麻酔してあおむけに寝かせ、直腸に電極を入れて電氣的に刺激すると射精する。その新鮮な精液を、これも麻酔で眠っている女性に注入する。

こうしてプチが妊娠し、1982年3月にポポを産んだ。今から約30年前のことである。当時、最新鋭の夜間のモニターテレビで出産を記録した。

プチは横臥していた。破水して、右手を尻に当ててはなめていた。出産のときが来た。あかんぼうが生まれたとたんにプチは「ギャー」という大きな悲鳴をあげて、猛然と前に逃げた。「魔物が出てきた」という感じなのだろう。プチは、あかんぼうを見たことも子育てを

見たこともない。

育児放棄である。獣医師の判断で人工保育になった。当時、チンパンジーを産めよ増やせよ、という感覚があった。そこでまたゴンとプチで人工授精した。

1983年12月にパンが生まれた。同じことが繰り返された。プチは出産直前に「ギャー」と泣き喚いて逃げ出し暴れまわった。あかんぼうはまさに産み落とされ、人工保育になった。

人間の手で育てられたチンパンジー。男性はセックスができないし、女性は子育てができないことが多い。そうして生まれた子どもを人工保育すると、また子育てのできない親になる。こうした負の連鎖が続く。

野生チンパンジーの母と子

1986年2月に初めてアフリカに行って、野生チンパンジーを見た。

最初の出会。西アフリカのギニアのボツソウの森。小高い丘の頂上付近だった。ジレという女性が、当時2歳半の娘のジャを胸にしがみつかせて、悠然と木から木へと渡って行った。

朝の陽の光をあびて、漆黒のふさふさとした毛が輝いている、その距離、約10メートル。しゃがんで親子のようすをじっと見た。チンパンジーが森のあるじで、こちらは見守るだけだ。

来る日も、来る日も、早朝から陽の沈むまで、チンパンジーを求めて森の中を歩き回った。いまほど人馴れしていなかったので、彼らはすぐに逃げてしまう。それでも、遠いこずえの上で安心してチンパンジーを、双眼鏡でじっくりと観察することはできた。木の実を食べ、若葉を食べ、木に登ったり降りたり。子どもなら飛び降りてみたり、いろいろな遊びをする。ひとしきり食べ終わると毛づくろいする。ハハハハとあえぐような笑い声をたてて、くすぐりっこをする。

いちばん印象に残っているのは母子の情愛だ。子どもは母親にいつもしがみついている。母親はあかんぼうの背中にそっと手を添える。夜は一緒に眠る。かたときも離れない。チンパンジーの子どもは、母親なしでは生きていけない。

1991年から92年にかけての乾季の観察のときだった。連れの研究者はいなくて、1人で約3カ月を過ごした。1月25日に、ジョクロと名づけた2歳半の女の子が亡くなった。母親はジレである。ジャが姉で、その妹に当たる子だ。

母親は、小さな亡骸を手放さなかった。乾季だったのでミイラになった。子どもが死ぬまでの2週間と、死んでからの4週間で観察し続けた。わが子を手放さない親の姿が深く胸に残った。

ちなみに、ホームページでも、そのようすを見ることができる。日英仏の3か国語のバージョンがある。『Jokro』とYouTubeに入れると、20分間の物語として編集されたストーリーがでてくる。ぜひご覧いただきたい。

(<https://www.youtube.com/watch?v=G0eWViFdkbY>)。

環境エンリッチメント

チンパンジーは本来が野生の生き物である。人間の手で、人間の環境で育つと、本来のチンパンジーではなくなってしまう。

そもそもボツウの森は、少なく見積もっても約 6 平方キロの広さがある。チンパンジーが頻繁に利用する核となる地域だけでその広さだ。たまに利用する場所も含めると 10 数平方キロになる。

1 平方キロとは、1 辺が 1 キロの正方形に等しい。千メートルかける千メートルの広さだ。つまり百万平米だ。10 平方キロというのはその 10 倍の 1 千万平米である。

京大の霊長研のチンパンジーたちは、広いとはいえ千平米に満たない広さで暮らしている。たて・よこ約 30 メートルの広さに等しい。一般の動物園と比べればかなり広い。しかし、野生と比べれば 1 万分の 1 ということになる。とても狭い。これは、チンパンジーを飼育するということの、逃れがたい初期制約といえる。環境が著しく違うので、本来の生態を復元するのはきわめて困難だ。

ジョクロの死ぬ前年の調査では、チンパンジーの飼育を担当する熊崎清則さんと一緒にボツウに行った。飼育現場の責任者に、ぜひ本来の彼らの姿を見てほしかったからである。

帰国して、2 人で、なんとか飼育環境を変えたいと努力を始めた。今から約 20 年前のことだ。

欧米の文献をあたって、「環境エンリッチメント」という用語に出会った。耳慣れない用語だったが、文献を検索してみると、研究論文の数が毎年増えていた。「動物福祉」という立場で、飼育環境を改善する試みのことを環境エンリッチメントという。環境エンリッチメントは手段のことで、達成すべき目標は「心理学的幸福」と呼ばれる。サイコロジカル・ウェルビーイング。その原語の適切な翻訳がなかったので、「心理学的幸福」と呼ぶことにした。ウェルビーイングはウェルフェア（福祉）とほぼ同義である。

アメリカでは、1967 年に動物福祉法という法律ができていた。そして 1985 年に、「心理学的幸福」という修正条項が追加された。人間の飼育するサル類（霊長類）には心理学的幸福が必須で、それを実現するために環境エンリッチメントをする必要があると法令に定められている。

どうすれば幸福を測れるだろう。自分なりに、心理学的幸福の定義を考えてみた。要は「自然のくらしに近いこと」それを幸福と考えることにした。幸福を定義する 2 つの行動指標が考えられる。

第 1 は、行動目録を野生のそれに近づける。

チンパンジーはいろいろな行動をする。木に登る。木から木へと渡る。なかまととつきみあいをする。毛づくろいする。横になる。木の実や葉を食べる。そうした個々の行動すべてをリストにして集めたものを行動目録という。

野生にはなくて、飼育下でみられる行動がある。たとえば、糞を食べる。糞をなすりつけ

る。吐き戻しをする。毛を引き抜く。膝を抱えて体を前後や左右にゆするロッキングをする。こうしたものは「異常行動」と呼ばれる。それをなくすことも、行動目録を自然のそれに近づけることになる。

野生と飼育で比較して、行動目録の違いでもっとも顕著なのは、樹上での行動だ。野生では日中の半分かそれ以上を樹上で過ごす。夜も樹上で寝る。つまり木に登って、降りて、樹上でくらす。木の枝を折りしいてベッドを作って眠る。

それに対して、飼育チンパンジーでは、樹上という環境そのものがほとんどない。地上の人間の眼の高さにあわせた生活を強いられている。

心理学的幸福の第2は、行動の時間配分を野生のそれに近づける。

チンパンジーに限らないが、人間やそれ以外の動物の行動目録を大きく分けると次の5つになる。「眠る」「(起きているが) 休息する」「食べる」「移動する」「他者と関わる」。睡眠、休息、採食、移動、社会交渉の5つである。

1日は24時間なので、そのうちのどれくらいの時間をそれぞれの行動にあてているか。それを行動の時間配分と呼ぶ。

野生チンパンジーも飼育チンパンジーも寝ている時間はそう変わらない。日の出とともに起き出して、日の入りとともに眠る。12時間は眠る。昼間も寝ているので、もっと長い時間寝ている。

両者でもっとも違うのは、採食に費やす時間だ。野生では、1日の3分の1から半分近くの時間を採食にあてている。いつも何かを食べている。

飼育チンパンジーは、飼育員が与える食物を、あつというまに食べてしまう。リンゴやバナナなど、食べやすいものが与えられる。ほかに食べるものがなく、することがない。だから糞までを食べ、またはいったん飲み込んだ食物を吐き戻して食べるようになる。異常行動とラベルされるが、本来の行動の時間配分に添った彼らなりのくふうでもある。

熊崎さんらと語らって、教員や大学院生たちの協力も得て、まずは飼育環境の改善に取り組んだ。運動場に高い塔を建てた。そして木を植えた。

当時、チンパンジーの運動場に木を植えるなど、だれも考えたことが無かった。どうせ引っこ抜かれるだろう。食べられるに決まっている。20本を植えて1本でも生き残れば良い、と考えて始めた。実際には多くの木々が生き残った。チンパンジーたちは高いところが大好きだ。塔を建てると、すぐてっぺんにゆく。塔を増やすと、みなが塔の上に登った。その分、地面の木々も守られる。

1995年、チンパンジーのすみかを新設できることになった。屋外運動場を作った。木を植え、小川も作った。水は小型ポンプを使って自動でくみ上げ循環させた。

1997年、塔の高さをほぼ倍の15メートルにかさ上げした。

15年後の今日、国内外の多くの動物園で、チンパンジーなどの大型類人猿の施設にこうした高い塔を見ることが出来る。地面には多くの木々が植えられ、頭上を類人猿が渡る。

物理的な環境エンリッチメントが進んだと言える。高い空間を利用してきて、樹上性のくら

しが再現された。木々は豊かに生い茂り、小川には魚が泳ぎ、それを狙って鳥がやってくる。昆虫も豊かで、いわば小さなビオトープになっている。

もっと自由に

2000年に、アイとアユムの親子が誕生した。同じ年に、クロエとクレオ、パンとパルの親子もできて、3組の親子が一度にそろった。霊長類研究所の運動場はとてにぎやかになった。

最高のエンリッチメントは、子どもをもつことである。母子のあいだでしかみられない、「しがみつく、抱く」という行動が出てくる。すこし大きくなると、父親にあたるチンパンジーが抱く。よそのおばさんが抱く。さらには、子どもたちがなかま同士で追いかけっこをして遊ぶ。

野生でしか見たことのない行動目録を、飼育チンパンジーでも見るできるようになった。社会環境をゆたかにする、社会的環境エンリッチメントだといえる。

霊長類研究所の飼育環境は、物理的にも社会的にも、まぎれもなく世界でもっともすばらしいもののひとつになったといえる。

そこまでたどりついて、さらに野生チンパンジーのくらしと比較してみると、改めてアフリカの自然の暮らしとの落差に気がついた。

二つの自由である。

「好きなところへ行く」「好きなときに食べる」

この二つの自由が満たされていない。移動の自由、採食の自由である。ごく一般的な動物園でのくらしを考えると、この二つの基本的な自由の大切さがよくわかる。

移動の自由について解説しよう。

チンパンジーの群れをひとつの区画で飼うのは適切ではない。複数の区画が必要だ。なぜなら、チンパンジーはいつも複数の小集団に分かれてくらす。分裂凝集する社会だからである。

広さは別として、ニホンザルをひとつの区画で飼うのはかまわない。ゴリラをひとつの区画で飼うのも良い。なぜなら彼らはいつもひとつの群れで動き回っているからだ。

チンパンジーにも群れはある。しかしそのメンバーはいつも三々五々に分かれている。パーティーと呼ばれる小集団がいくつかあって、それが出会って大きな集団となり、またメンバーを取り換えて小さな集団に分かれていく。

コンソート（配偶関係）といって、仲の良い男女が2人だけで遠くに行ったりもする。また母子はひっそりと2人だけで過ごしたり、子育て中の母子ばかりが集まったりもする。ときには、大きくなった息子が、老母を丹念に毛づくろいすることもある。おとなの男性ばかりがつるんで、お尻の腫れた魅力的な女性のあとを追いかけてたり、なわばりの境界領域を見回ったり、集団で外敵に立ち向かったりする。

つまり、チンパンジーを飼育する環境は、複数の小集団にあわせて、複数の生息地から構

成されることが望ましい。「複合運動場」である。

2010年から2012年にかけて、国の最先端研究基盤支援事業に採択されて、チンパンジーの大型ケージを作った。高さが、建物でいえば6階建てに相当して、16メートルを超える。犬山では二つの大型ケージを作った。そのケージの間を空中回廊でつなぐ工事に年末からとりかかる。両ケージは屋外運動場と隣接している。

2013年の春には完成する。そうすると、世界にまったく類例のないチンパンジーの飼育環境ができる。もちろん広さの制約はあるとはいえ、複数の区画から成る生息地だ。仲間と離れて、あるいは気のあった仲間だけで、いつでも好きなところに行ける。移動の自由が保障される。

次に、採食の自由について解説しよう。

チンパンジーは、飼育下では、自由に食べることができない。飼育員が食べ物を与える。だから決まった時刻にならないと食べられない。

1日3度の食事が与えられるとしよう。朝、飼育員が出勤してきて朝食の準備をする。9時に朝食だ。昼は12時になればまた何かもらえる。夕方4時ごろ夕食がもらえる。1日の量としてはこれで十分だが、行動の時間配分で述べたように、採食時間は著しく短い。

屋外運動場に木々が繁茂すれば草も生い茂る。イネ科の草本はチンパンジーも好んで食べる。したがって、そうおいしくはないが、いつも何かを自由に食べられる条件は、最低限度、整っている。

霊長類研究所では、午前中に2回、午後には2回、認知実験がある。つまり、3度の食事とあわせると、1日7回の食事の機会がある。これは野生チンパンジーの採食のリズムとほぼ同じだ。イチジクの実を30分間食べたとしよう。すこし休んでクワの木に移り、そこで食べてひと休み。そうしたことを繰り返して1日を過ごす。

しかし、従来の建物内のブースでおこなわれる認知実験は、研究者がチンパンジーを呼ぶところから始まる。「アイ、おいで」と呼ぶ。そうでないと勉強が始まらない。呼ばれてはじめて、とことこ歩いて勉強部屋に向かう。コンピュータの課題を解くと、正解のごほうびとしてリンゴの小さなかけらや、レーズンの半粒がもらえるしくみだ。

これを新たに「ウォークイン・ブース」に変える試みが進行中だ。建物内ではなく、日ごろ暮らす運動場や大型ケージの側壁に、チンパンジーがいつでも自由に立ち入るブースを設置する。

そこにはコンピュータの画面があり、タッチスクリーンがあり、いつもの勉強がいつでもできる。顔を正面から捉えたビデオ映像で顔認証をして、だれが来たかをコンピュータが自動識別する。各チンパンジーにあった勉強を提示できるしくみだ。

ウォークイン・ブースが試験的な稼動を始めた。前の晩に用意した食物を、朝起きてすぐにでも好きなときに食べることができる。もちろん食事の量は、各人を個別にコンピュータが制御する。

自由に採食できる日が、そう遠くない将来にやってくるだろう。認知実験は、あくまで環

境エンリッチメントの一環だ。より良い暮らしを保証するなかで、彼らの心のはたらきを研究したい。

参与観察から介助保育やリハビリへ

飼育されているチンパンジーと野生チンパンジーのあいだには越えがたい溝がある。それは人間との関係だ。野生のものはそっと静かにしておけば、人間との接触は限りなくゼロに近くなる。

しかし、飼育チンパンジーは人間との関わりなしには生きていけない。つまり、飼育する側としては、チンパンジーとのあいだにどのような関係を取り結ぶのかがつねに問われている。

1983年、プチがパンを産んだ。産み落として逃げた。しかたなく、自宅に毎晩連れ帰って育てた。ちょうど同年になる娘がいた。

同じ家で、同じように育ててみて、すぐに気がついたことがある。こうした古典的な比較研究はフェアではない。妥当ではない。なぜなら人間の子どもには親がいるが、チンパンジーの子どもには親がいない。本来の親ではない者に育てられ、本来の暮らしとほど遠い生活をしいられている。

2000年にチンパンジーの3組の母子が誕生して、「参与観察」という新しい研究方法を確立した。これまでの研究との違いはただひとつ。母親があかんぼうを育てる。けっして親と子を引き離さない。

ただし、母親と研究者のあいだには長い期間を経て培ってきたきずながある。そこで、「ちょっとお子さんを貸してください」というかたちで、子どもの認知発達を調べることができる。人間の親子を相手にするばあいと同じ手法だ。

母子はつねに一緒にいるので、子どもは母親のようすを見て育つ。母親がコンピュータのモニターに向かって課題を解くのを興味深げに見守る。

ごほうびででてきたりんご片を子どもがかすめ取る。トークンと呼ばれる硬貨が出てくることもあるのだが、それをだいじにもてあそぶ。野生と同じように、実験室で母親が石器を使ってナッツを割ればそれをじっと見る。母親が積み木を積みば、それをまねようとする。

こうして、母子がともにくらす環境のなかに、研究者が寄り添うように介入して認知研究を実施するようになった。「参与観察」と呼ぶ手法である。

そうした過程で、子育てについては「介助保育」という方法にたどりついた。飼育されているチンパンジーは、出産はするが子育てのできないばあいが多し。そこで人間が介入して子育てを支援する。たとえば、授乳がへたな母親のばあい、抱いているあかんぼうに人間が粉ミルクを補給する。

2003年に、プチが3人目の娘を産んだ。ピコと名付けられた。プチはまた育児放棄した。そこで人間が10日間ほど人工保育した。そして、介助保育の手法で、プチと同じケージに飼育担当者が入り抱かせるように仕向けた。最後は、あかんぼうをひょいと母親の胸に押し

付けた。

あかんぼうは、つねに何かにしがみつこうとする。ピコは母親の体毛を即座にしっかりと握りしめた。あかんぼうにしがみつかれると、母親はそっとそれを抱きとめた。以後、2人は離れることがなかった。

母親には母性がある。出産のときこそ動転して逃げても、落ち着けばあかんぼうに興味を示すだろう。いったん母子が離れたとしても、頃合いをみはからって、できるだけ早期に母親に戻すことが可能だ。母乳は、乳首を吸われることによって分泌される。母親プチと娘のピコの例でいえば、生後10日ほど経過しても、まだ母乳が分泌されていた。チンパンジーの日々のくらしに人間が参加し、飼育に携わり、そこで深いきずなを作る。そのきずなのうえで、介助保育をおこなう。隔離しては人工保育する、という負の連鎖を断ち切って、チンパンジーの母親がその子どもをしっかりと育てられるようにすることがたいせつだろう。

飼育されているチンパンジーと人間の関係が顕著に現れるのは、医療という措置だ。野生チンパンジーの研究のばあい、人間が彼らを医療することはない。しかし、飼育下では、人間とチンパンジーの距離がつねに近いので、野生よりもいっそう双方向の病気の伝染に気をつける必要がある。風邪をひく。下痢をする。そうしたチンパンジーがいれば投薬し治療をする。またけんかもよくするので生傷が絶えない。消毒したりときに傷を縫合したりする。

2006年9月26日の朝、レオと呼ぶ当時25歳のチンパンジーの男性が突然寝込んだ。首から下が完全に麻痺して動けない。

若い獣医や教員や飼育員や大学院生たちがチームを組んで1日24時間の看護体制を組んだ。幸い、神様のご加護があって回復に向かった。その間、親しい人間が同じケージに入って、レオの拘縮した足を伸ばすリハビリをおこなった。

いまでは、歩くことを促す訓練が始まっている。コンピュータのタッチパネルの認知課題を解くと、約3メートル離れた場所に食物が自動配給される。それを食べるために移動する。また戻って課題に向かう。つまり往復6メートル。全部で100問あるので600メートル、1日に午前と午後のリハビリがあって、合計1.2キロ歩くことになる。100で120キロ。「チンパンジー・リハビリ学」とでも呼べるような新たな学問ができつつある。こうした手法は、人間のリハビリにも生かされるだろう。

最後に、チンパンジーと同じ場所で対面することは、つねに危険を考慮しなければならない。強靱な顎と大きな犬歯がある。噛まれれば指がちぎれる。骨が碎ける。チンパンジーについての正しい知識と、長い歳月をかけた信頼関係の育成が不可欠だ。参与観察によって、対面できるようになる。それが研究であり、チンパンジーを深く理解したということの証拠だともいえるだろう。

日本のすべてのチンパンジーのために

日本には、327人のチンパンジーがいる。23人のゴリラがいる。48人のオランウータンがいる。107人のテナガザルがいる。ひとりひとりの戸籍を作った。文部科学省の委託を受

けた「大型類人猿情報ネットワーク」という事業を2002年から始めている。霊長類研究所のチンパンジーで培ってきた知識と経験を、日本のすべてのチンパンジーに、さらには広く類人猿すべてのために生かしたいと思った。個人別のデータベースを作り、広く一般に公開し、英語でも発信している (<https://shigen.nig.ac.jp/gain/top.jsp>)

人間とチンパンジーは、ゲノムの塩基配列の98.8パーセントが同じだ。したがって、C型肝炎、エイズ、エボラ出血熱、すべての病気が双方向に感染する。こうした病気の原因究明や治療法の開発に、日米欧でチンパンジーが使われてきた。とくに1970年代から80年代にかけて、当時非A非B型と呼ばれていた肝炎があり、それがC型肝炎ウイルスによるものだと1989年にわかった。チンパンジーで初めて見つかったウイルスである。

人間の福祉のために、人間以外の動物を使うことは、やむをえないという側面がある。人間は、肉を食べる。そうした動物は家畜と呼ばれる。イヌやネコなど伴侶動物も暮らしに必要だ。医薬品の開発にはラットやマウスなど実験動物も欠かせない現状がある。

しかしこれらの動物はすべて、長い歳月をかけて、本来の野生の動物から姿かたちを人間が変えてきたものだ。それに対して、チンパンジーは野生の絶滅危惧種である。彼らがただ人間に近いから、という理由ではない。そもそも、絶滅しかかっている動物を人間のために利用するのは妥当ではないだろう。

1998年、サガ(SAGA)という運動を始めた。「アジア・アフリカにくらす大型類人猿を支援する集い」の英文略称である。その当時、日本の3つの製薬会社に合計136人のチンパンジーがいて、医学感染実験に使われていた。サルやマウスは感染しないが、ほぼすべての病気に感染するからだ。主にはC型肝炎の感染実験である。

アフリカの森で、おとなたちを撃ち殺し、子どもをさらってくる。遠く、日本や欧米の医学感染実験施設に入れる。少なくとも約150人のチンパンジーが1970年台から1980年台初頭にかけて日本に輸入された。わが国がワシントン条約を批准して、こうした絶滅危惧種の輸入を止めようとしたのは1980年のことだ。

健康な子どもに肝炎ウイルスを注射する。肝炎になる。血液を定期的に採取して、そのGPTやGOTという肝炎の数値をモニターする。そして、治療のための薬を開発し肝炎にしたチンパンジーで効き目をテストする。

1998年にちょうど遺伝子治療が開始されようとした。どんな副作用があるかわからないので、人間ではとてもできない。それをチンパンジーで試そうというのだ。しかし、人間でできないからといって絶滅の危惧される動物を医学感染実験に使用してよいのだろうか。

チンパンジーの研究者として20余年を過ごしていた。もはやこれは看過できないと思った。直接、製薬会社に乗り込んだ。医学感染実験をしている研究者に会った。そして問題解決の手法を考えた。しかし、怒りで物事は変えられない。

医学感染実験をおこなっている当事者を含め、実験研究をおこなっている者、野外で調査している研究者に広く呼びかけた。自然保護活動をしている人々、動物園で働いている人々、メディアの方、官公庁の方、そして一般の人々にも呼びかけて、大型類人猿の保護と福祉と、

そして医学感染実験の廃絶をともに考えることにした。それがサガ (SAGA) である。

幸い、ジェーン・グドールさんという野生チンパンジー研究の第一人者の参加を得て、毎年それが続いている。今年で 15 回目を迎えた (<https://www.saga-jp.org/>)。

2002 年、前述の「大型類人猿情報ネットワーク (略称 GAIN)」を立ち上げた。毎年の運動が徐々にみよって、製薬会社もチンパンジーを医学感染実験に使わないことに同意した。そして 2006 年秋に、日本の医学感染実験は止まった。

そうすると、何の利益も生み出さない、膨大な数のチンパンジーが会社に残ることになる。だれが、どうやって、その面倒を見るか。製薬会社だけでは支えきれない。そこで、解決方法を一緒に考えることにした。国への移管しかありえない。

2008 年 4 月、野生動物研究センターを京都大学に設立した。野生の絶滅が危惧される大型動物の研究教育施設である (<http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/>)。そこが中心になって、日本各地の動物園と連携協定を結んだ。京都市動物園、名古屋市東山動物園、横浜ズーラシア、などである。まず、製薬会社で不要になったチンパンジーを、群れとして再構成し、それらの動物園に無償で差し上げた。ただし、飼育施設を全面的に新装して、チンパンジーたちに生涯にわたる安寧なくらしを送らせることが条件だ。

2011 年 8 月、野生動物研究センターのもとに「熊本サンクチュアリ」が発足した。かつての医学感染実験施設とそのチンパンジーを京大に無償譲渡してもらった。ここを拠点に、日本のチンパンジーすべてに目配りし、将来の遺伝的な関係を配慮しつつ、全体の群れづくりを進める (<http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/kumasan/>)。

2012 年 5 月 15 日、最後に残った医学感染実験施設から 3 人のチンパンジーたちが引き取られた。彼らは、室内の小さな檻に飼育されていたので、小さなときから 30 年間囚われの身だった。太陽を浴びたことがない。木々の風のそよぎを知らない。地面に足をおろしたこともない。30 年の幽閉に耐えられたのは、「いま、ここを生きる」というチンパンジーの本性によるのだろう。明日を思いわずらわず、今日を生きてきた。そして、熊本サンクチュアリのなかまたちと日々着実に交流を重ね、チンパンジーらしい風貌とふるまいをとりもどしつつある (<https://langint.pri.kyoto-u.ac.jp/ai/ja/k/128.html>)。

チンパンジーの研究を通じてその福祉を考えるようになった。これからは、彼らの福祉を考えるとところから研究をさらに展開していきたいと思う。

謝辞

紙幅の関係で個々のお名前を挙げられませんが、たくさんの共同研究者のおかげで成り立っています。なお、科研費特別推進研究 (# 24000001) ならびに最先端研究基盤支援事業の支援を得ました。ここに記して感謝します。(補筆：なお本稿は、『発達』誌上で公表された論文を、ミネルヴァ書房の特別のご配慮によりホームページ上で公開しています)。